

美術館の普及活動

石見美術館 学芸課長

南目 美輝

石見美術館では、「美術」に親しんでもらうことを目的に、グラントワの施設全体を使って、開館以来様々な普及活動を行って来ます。その内容や規模は、その時開催している企画展の内容にあわせたり、コレクションにちなむものだったり、毎回異なります。今回は自分が担当したもので、ボランティアのみなさんといっしょに行った印象深い事業について、いくつかご紹介しましょう。

11年前の開館時には美術家の小石原剛さんを招き、開館を祝う「青空茶室」を開催しました。中庭と回廊を茶室に見立てたこの企画では、二千個もの素焼きのカップをつりました。この壮大な「インスタレーション」（場所に

あわせて美術作品を設置する展示手法のひとつ）は、ボランティアの協力無しでは実現し得ませんでした。お茶会ということで、お茶を点てるためのお湯の提供も、ボランティアとわしたちスタッフが行いました。

最近の事例では、一昨年度と昨年度に開催した小中学生対象の「ファッションショー」のワークショップが印象に残っています。これは森英恵さんの財団から頂戴した寄附金による事業で、「子ども服飾デザイン研究室」と銘打ち、1回目は「石見美術館の制服を作ろう」、2回目は「子ども服を作ろう」という内容で行いまし

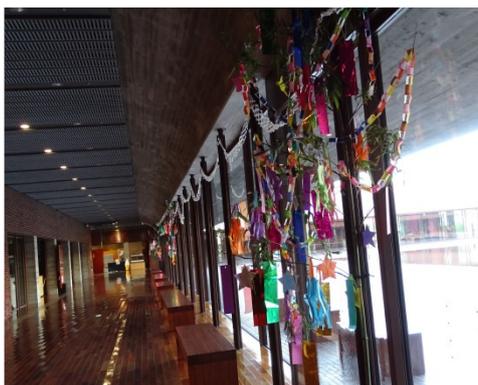
た。小学1年生から中学1年生まで、延べ23名が、美術館の展示を見て、服のデザインを考え、デザイン画を描き、布を切って縫い合わせ服を作り上げ、それを着てファッションショーで発表したのである。その自由な発想で描かれたデザイン画（ひとりひとり全部違ったデザインです！）を服という実物に落とし込むのに、ボランティアスタッフと一緒に型紙を用意し、制作を手伝い、子どもたちをサポートしました。ファッションショーの本番では、子どもたちの衣装替えなどの裏方の作業を一緒にこなしました。

このような濃い内容の事業の場合、いつも感じるのは、ボランティアとは美術館にとつての「お客さん」などではなく、一緒に問題を乗り越えていくスタッフ、仲間であるということです。

この夏は、ファッションの分野で創造性の高い活動を行う次世代の育成を目的として「ファッションクリエイター・トレーニング」

ワークショップという、新しい試みが始まる予定です。その準備にも連日、ボランティアのみなさんが通ってきてくださっています。

毎回どんな「球」が飛んでくるのか分からない美術館の普及活動なのですが、ベテランのボランティアさんは、「どんな球でもうけとめるよ」と、私たちの活動を見守ってくれています。その支えがあるからこそ、少々無謀な内容であっても、私たち美術館スタッフは新しい事業に向かっていけるのでしょね。



石州口の戦いから百五十年

情報発信ボランティア

飯塚 哲也

6月12日(日)に記念行事「石州祭り」がグラントワで開催。

多田神楽保存会による石見神楽

「扇原」、広島大学 三宅名誉教授による「石州口戦争に見る日本の近代化」の講演会などがありました。

益田の皆さんはご存じの 地元の英雄と言つてよい「岸静江国治」が死守した扇原関門の戦い。子供のころからよく聞かされた出来事です。

時は 明治元年まであと2年の西暦1866年のことです。(150年前のことです。)とところは、益田市多田町多田温泉の近く。

当時は津和野から横田・梅月を通り多田に抜け益田に向かうのが主要道路であったようです。津和野から横田・梅月あたりまでは津和野藩、多田の扇原からは浜田藩で、旧益田は浜田藩に属していました。

津和野藩と浜田藩の境に、扇原関門がありました。

大村益次郎率いる長州軍は中立の立場を取る津和野藩を過ぎると、いよいよ幕府軍である浜田藩と、この

地益田で激突することとなりました。関門を死守する「岸静江国治」率いるわが軍は手薄であったといわれています。

敵兵(長州軍)は近代兵器を持った1500名とのこと。槍の名手と言われた「岸静江国治」は敵弾を受けても仁王立ちとなりその任務を全うしたといわれています。

その後長州軍は益田市街に進み攻撃を加え、わが浜田藩の兵士は 浜田方面に敗退することになります。長州軍の勝利は決定的となり、そして長州と薩摩が中心に明治維新へと時代は推移しました。

益田での「石州口の戦い」はのちに「新しい日本の夜明け」と言われるようになりました。

歴史的には重要な戦いであり、歴史に名を残す地「益田」ということが出来ます。ところで、長州藩は幕末から明治維新にかけて優秀な人材を輩出し、日本の近代化に大きな功績を残しました。

昨年萩市では世界文化遺産として

松下村塾、反射炉、製鉄所跡、造船所跡などが登録されました。

益田もこのことに無縁ではあつてはなりません。

益田市を活性化するには、萩市、山口市、津和野町など近隣の街と呼応してイベントを開催し、お互いに市民が行き来して交流を深め、文化遺産、産業遺産を全国に広めてゆく行動がますます必要だと思います。

益田には雪舟・人麻呂・室町時代の文化遺産、グラントワ、おいしい魚、農産物、温泉など、そして扇原関門跡があります。

近隣の街と手を組んで全国から 沢山の人が訪れ山陰らしさを楽しんでもらえるプランができることを期待しています。



あ と が き

東北復興支援活動、50×50のタペストリー作りに多数参加

去る5月31日 グラントワに東北復興支援コンサートツアーが巡ってきました。(企画・主催はできることをできるだけプロジェクト)

音楽家とアーティストが手を組み、津波で被災した着物をリメイクして衣装を作り、また その断片を縫いこんだ50センチ四方のタペストリー(パッチワーク)作りをしようというものです。

みんなが作ったタペストリーは平成32年には被災した石巻市の新しい文化ホールの「緞帳」(どんちよう)となる予定とのことです。

グラントワでは 約30枚の作品を皆さんが出品されました。

すでに、2000枚 近くが集まっているようでした。

写真は 益田の皆さんの作品をバックにコンサートの模様です。

(哲)

